

ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本 1927 番 第 3-10 葉に関する記述

A Further Description of Cod. Vat. gr. 1927, ff.3-10: A Comparison with Marginal Psalters

辻 絵理子*

TSUJI Eriko

ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番は、11 世紀末から 12 世紀頃にビザンティン世界で制作された挿絵入りの詩篇写本である。全 289 葉に 145 もの図像を有する貴重な作例だが、その独特の図像体系には比較対象となる写本が現存しない。本稿は同写本のテキストと挿絵、銘文を突き合わせ、同じ章句に挿絵を有する他の詩篇写本作例や、ダヴィデ伝図像を持つ他のジャンルの写本と比較しながら、紙幅の許す限り分析を進めていく試みの一部である。ここでは 1927 番の第 3 葉～10 葉、本文である詩篇は第 3 篇～8 篇について論じている。

キーワード：ビザンティン美術、写本挿絵、詩篇、王の書

前稿から引き続き、ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番 (Cod. Vat. gr. 1927、以降「1927 番」) の記述を行っていく。ビザンティン世界の図像を有する詩篇写本のうち、巻頭挿絵や扉絵ではなく各詩篇の章句に複数の挿絵を施す作例は余白詩篇にのみ見られる。孤立した作例である 1927 番は、余白詩篇のように個々の章句近くに挿絵を配するわけではないが、各詩篇の題詞の後に本文の内容に関わる挿絵を描き、銘によってその対応章句を示唆する。両者の詳細な比較は有意義と言えるだろう。常に挿絵の描かれる章句が重複するわけではないが、同じ詩篇に図像がある場合は章句の違いに言及しつつ、比較を行っていく。

また、ダヴィデ伝図像については 11 世紀の挿絵入り「王の書 Βασιλειῶν」(セプトウアギンタではサムエル記、列王記の各上下計 4 巻を合わせて王の書 4 巻とする) である Vat. gr. 333² (以降 333 番) が現存している。この写本は 2 コラムの本文で語られる物語に対し、コラム・ピクチャー形式の挿絵が随所に挿入されており、ダヴィデ伝のまとまった図像を見る事が出来るため、詩篇写本である 1927 番に共通する物語図像が描かれる箇所は、適宜参照する。

* つじ・えりこ、埼玉大学准教授、西洋美術史、ビザンティン美術史

¹ E. T. De Wald, *The Illustrations in the Manuscripts of the Septuagint, III, Psalms and Odes, Part 1: Vaticanus Graecus 1927*, Princeton, 1941. 同写本及びビザンティン詩篇写本の基本的な解説と参考文献については以下を参照されたい。辻絵理子「ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語詩篇写本 1927 番 第 1-2 葉に関する記述」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 56 巻第 2 号、2020 年、97-103 頁。各写本の比較にあたっては S. Dufrenne, *Tableaux synoptiques de 15 Psautiers medieviaux à illustrations integrales issues du texte*, Paris, 1978 も参照している。

² 全 143 葉、285×216mm。J. Lassus, “Les miniatures byzantines du Livre des Rois, d’après un manuscrit de la bibliothèque Vaticane,” *Mélanges d’archéologie et d’histoire* 45 (1928), pp.38-74; idem, *L’illustration byzantine du Livre des Rois: Vaticanus Graecus 333*, Paris, 1973; G. Galavaris, “Jean Lassus. – L’illustration byzantine du Livre des Rois. «Vaticanus Graecus 333» (Bibl. des « Cahiers archéologiques » 9),” *Cahiers de Civilisation Médiévale* (1975), pp.163-164; I. Karavrezou, “The Vatican Book of Kings (*Vat. gr. 333),” V. Tsamakda(ed.), *A Companion to Byzantine Illustrated Manuscripts*, Leiden-Boston, 2017, pp.227-235.

f. 3v³

枠の中央に、天を示す青い半円が描かれる。左隅で赤い衣を纏った女性を青い衣の男性が抱き締めている。右隣で赤いチュニックの男性が棒を振り上げ、足元に頽れた青い衣の男性が頭から血を流す。背景の山と建築モチーフによって緩やかに区切られた右側では、白髪に王冠を被ったダヴィデが馬に乗り、アブサロム率いる騎馬兵たちに追われている。顎を引いたダヴィデの馬の頭部が背景から少しはみ出している。右上には背景の角を利用して天を表す青い弧が引かれ、ダヴィデは逃げながらも手を挙げて祈りを捧げる。ニンプスを持つのはダヴィデのみである。

挿絵の直前に書かれた題詞(詩篇 3:1)「Ψαλμὸς τῷ Δαυιδ, ὁπότε ἀπεδίδρασκεν ἀπο προσώπου Ἀβεσσαλώμ τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ」ダヴィデの歌、彼がその息子アブサロムの面前から逃げたときに⁴から、この詩篇がサム下 15-18 章で語られるアブサロムのエピソードを踏まえたものと解釈されてきたことが判る⁵。続く詩篇 3:2 は絵の下に書かれるが、冒頭 Κύριε のカッパがイニシャル装飾にされている。これ以前の挿絵は剥落が酷かったが、この場面は比較的状态が良く、用いられている顔料の種類が多さが窺える。馬の毛並みや翻るマント、兵士の盾の模様や鎧の光沢に使われたハイライトも残る。ダヴィデの頭上にある青い銘文は、本文 2 節「主よ、私の苦しみのなんと多いことでしょう。／多くの者が私に立ち向かい」の冒頭からの抜粋で「κ(ύριε) τί ἐπληθύνθησ[αν] 主よ、何と重きものを」、画面左の金地背景に書き込まれた銘文は「ἡ ἰστορία τ(ῆ)ς ἐπιγρ(α)φῆς ἐστίν これは銘に記された物語である」で、稀有な挿絵に説明を加えていると考えられる。ドゥヴァルトのモノグラフはこの箇所の記述にサム下 13 章をセプトゥアギンタから数節引用するが⁶、無論写本に本文として書かれているのは詩篇のテキストのみである。

タイトルで言及されている逃走するダヴィデの図像は、他の詩篇写本にも見られる。3:2 に対し、『テオドロス詩篇』(BL, Add. 19352) 7 f.2v 本文下の余白では、右側に兵士を従えたダヴィデが徒歩で逃げており、左から騎乗のアブサロムが兵士と共にそれを追う。赤で書き込まれた銘文は題詞の引用で「ὁπότε(ε) ἀπεδίδρασκεν ἀπο προσώπου Ἀβεσσαλώμ 彼がアブサロムの面前から逃げたときに」。『クルドフ詩篇』(Moscow, State Historical Museum, Cod. gr. 129d) 8 f.3 でも『テオドロス詩篇』

³ 各国図書館では、オンライン上で写本カラー図版の一般公開が進められている。1927 番も全頁が掲載されており、細部の拡大も自在であるため、比較作例と併せて適宜参照されたい。ヴァティカン図書館デジタル・コレクションズ <https://digi.vatlib.it/ms/> (最終閲覧日 2021 年 7 月 11 日)、大英図書館デジタル化写本 <https://www.bl.uk/manuscripts/> (最終閲覧日 2021 年 7 月 11 日) 各写本番号で検索が可能である。

⁴ 銘文は、全て筆者の試訳である。書き起こしのないもの、省略して書かれているものは適宜補足する。詩篇本文の引用は聖書協会共同訳と岩波の旧約聖書翻訳委員会訳を参照しつつ、セプトゥアギンタと大きく異なる箇所については都度指摘する。A. Rahlfs, *Septuaginta: Id est, Vetus Testamentum Graece iuxta LXX interpretes*, vol.1, Stuttgart, 1979; A. Pietersma and B. G. Wright (eds.), *A New English Translation of the Septuagint and the Other Greek Translations Traditionally Included under that Title*, Oxford, 2007.

⁵ 後世の編者は「ダヴィデの」という題詞のある詩をダヴィデ作と解釈し、その内容に基づいてダヴィデの伝承(サム上 16 章-王上 2 章)で語られるそれらしい出来事によって説明したと思われる。旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店、2005 年、5-7 頁、註 19、月本昭男『詩篇の思想と信仰 I 第一篇から第 25 篇まで』新教出版社、2003 年、39 頁。テオドロスの註解でも、題詞に基づいてサム下 13-17 章のエピソードが言及されている。Migne, PG 80, cols. 884-885; R. C. Hill (trans.), *The Fathers of the Church: Theodoret of Cyrus, Commentary on the Psalms, 1-72*, Washington, D.C., 2000, pp.60-62.

⁶ De Wald, p.4.

⁷ S. Der Nersessian, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge II: Londres, add. 19.352*, Paris, 1970; Ch. Barber (ed.), *Theodore Psalter: Electronic facsimile*, British Library, 2004; P. Finlay, *Making and Viewing the Theodore and Barberini Psalters (London BL.Add.19.352 and Vat.Barb.gr.372)*, diss., Queen's University of Belfast, 2005. 前稿と重複するため全てを挙げてはいない。前出註 1 参照。以降、他の比較作例についても同様である。

⁸ M. V. Šepkina, *Miniatury Hludovskoi Psaltyri: Greceskij illjustrirovannyj kodeks IX veka*, Moscow, 1977; K. Corrigan, *Visual Polemics in the Ninth-Century Byzantine Psalters*, Cambridge, 1992; M. Evangelou, "Liturgy and the Illustration of the Ninth-Century Marginal Psalters," *DOP* 63 (2009), pp.59-116.

と同様ダヴィデは徒歩で逃げているが、余白の下方に騎馬兵たちを描き、ダヴィデらは本文の横に配されるため、斜めに追う構図になっている⁹。『バルベリーニ詩篇』(Cod. Vat. Barb. gr. 372)¹⁰ f.8は『クルドフ詩篇』と同じ構図で、地続きであることを強調するかのように階段状の地面が緑の帯で描き足されている¹¹。『プリストル詩篇』(BL, Add. 40.731)¹² f.10は、挿絵もテキストと同じように左から右に読むという原則を外れ、本文下の余白左から騎乗のダヴィデ、それを追うアブサロムと騎馬兵たちの全員が左方向へと進んでいる¹³。以降、比較作例の呼称は『詩篇』を除いて表記する。

1927番 f.3vの画面左に見られる、これらのエピソードの起因となった出来事を詩篇第3篇に描く作例は管見の限り他に例がない。アブサロムが父ダヴィデに反逆することになったとされる原因はサム下第13章に遡る。アムノンがアブサロムの妹タマルを襲い、辱めた上で追い出したことを知った時、ダヴィデは怒りはしたが長子であるアムノンに対して罰を与えなかった。アブサロムはこれを憎み、二年後に宴会を催して父と兄弟たちを集め、従者たちに銘じて兄アムノンを殺させ、逃走した。最終的に父王に反旗を翻して殺されるが、ダヴィデも一度はエルサレムから逃れることになる。第3篇本文が敵に囲まれた者の嘆きと祈りであることから、この逃走の場面のみが描かれる作例が多いが、1927番のみは同じ枠内の左隅にタマルに襲い掛かるアムノン、すぐ隣にアブサロムの従者に打ち殺されるアムノンを描き、銘文で補足する。物語の因果関係を強調するためであろうか。同写本には、本文に基づいた銘の助けがあって説明が可能になる、いわゆる^{リテラル}字義的な図像が多いため、珍しい挿絵と言えるだろう。

これに関わる『王の書』333番の図像は、f.53に描かれているアブサロムのアムノンへの復讐(それぞれ「Αβεσσαλ(ών)」、「Ἀμν(ών)」の銘あり)と、その報告を受けるダヴィデ(サム下13:23-34)¹⁴、f.55にヨアブの麦畑を焼くよう命じるアブサロムと、それを知ってアブサロムを訪ねるヨアブ(銘は「Αβεσσαλών」、「Ἡ χώρα Ἰωάβ ヨアブの地所)」、ようやく目通りを許されダヴィデの前にひれ伏すアブサロムである(サム下14:28-33)¹⁵。この写本で中心人物として描かれているのはアブサロムであり、一連の出来事の起点となった場面は1927番のように絵画化されない。

なお、1927番にはもう一か所アブサロムが登場する。彼の死の場面が、ユダの自死と並置するかたちでf.204に描かれる。美しく豊かな髪を持つことで知られたアブサロムだったが、その髪がテレビンの木に絡まって宙づりになったところを、ヨアブに心臓を突き刺されて死んだ(サム下18:9-

⁹ 銘は「ΔΑΔ ΦΕΥΓΕΙ ΔΑΒΙΔΕΣΙΣ 去る」。

¹⁰ J. C. Anderson, P. Canart and Ch. Walter, *The Barberini Psalter: Codex Vaticanus Barberinianus graecus 372*, New York, 1989; J. C. Anderson, "The Date and Purpose of the Barberini Psalter," *CahArch* 31 (1983), pp.35-67.

¹¹ 銘は『クルドフ』同様「Δα(ὐ)δ φεύγει ΔΑΒΙΔΕΣΙΣ 去る」。これら関係の深い3写本は、『クルドフ』と『バルベリーニ』が説明的な銘文を施し、『テオドロス』は簡素な銘になっていることが多いので、この箇所は逆転はやや目立つ。

¹² M. P. Perry, "An Unnoticed Byzantine Psalter," *The Burlington Magazine* 38 (1921), pp.119-128; 282-289; S. Dufrenne, "Le psautier de Bristol et les autres psautiers byzantins," *CahArch* 14 (1964), pp.159-182; eadem, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge I: Pantocrator 61, Paris Grec 20, British Museum 40731*, Paris, 1966, pp.49-66, Pls.47-60; L. Brubaker, "The Bristol Psalter," Ch. Entwistle (ed.), *Through a Glass Brightly: Studies in Byzantine and Medieval Art and Archaeology, Presented to David Buckton*, c.2003, Oxford, pp.127-141.

¹³ 銘は「Δα(ὐ)δ φεύγει ΔΑΒΙΔΕΣΙΣ 去る」と、「Αβεσσαλώμυ Αβσαρομυ」。Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs*, p.54.

¹⁴ Lassus, *L'illustration byzantine du Livre des Rois*, p.76, Fig.94.

¹⁵ ラシユスのモノグラフではf.56となっているが、f.55である。*Ibid.*, p.77, Fig.95。また、f.55のアブサロムを訪ねるヨアブ、アブサロムを迎えるダヴィデ、ダヴィデの前で腰を折るヨアブの姿のみ、人為的に削られたかのように酷く剥落している。一連の図像でアブサロムは青い衣を纏って描かれているが、ダヴィデの拝謁を許されひれ伏す場面ですく腰を折っているのは淡いピンクの衣を着たヨアブのように見える。続く場面(f.60)ではアブサロムはピンクの衣を着ているため、この場面ではヨアブと服装の配色が逆転しているのかもしれない。

15)。この挿絵もまた他の詩篇写本に例のないものである。333番 f.60はこの箇所挿絵として、アブサロムの髪が木に引っかかり、乗っていた馬が走り去ろうとしている場面を描く(銘は「Ἡσφαργή Ἀβεσσαλώμ Αβεσσαλωμ 弑逆」)¹⁶。勿論こちらの写本は本文であるサムエル記の内容を描いているため、新約聖書の一場面であるユダの死が並べて置かれることはない。

f. 4v

第4篇の題詞の下に挿絵が置かれる。矩形中央上部に天を表す青い半円が描かれ、その真下で王冠を被った白髪のダヴィデが、中腰に両手を挙げて祈りを捧げている。中央の丘の上をよく見ると、十字架とその中央に配されたキリストのメダイオンが赤い線で残っている。左右の小高い丘の手前にはそれぞれ群衆が立って話す身振りをしており、右側中央近くで祈るニンブスを着けた修道士姿の男性が目立つ。右側手前には三台のベッドが並べられ、全て男性が横たわっている。

ダヴィデの横の青い銘文は詩篇4:2「わが義の神よ／呼びかけに答えてください。／あなたは私を苦しみから／解き放ってくださいました。／私を憐れみ、祈りを聞いてください」からの引用で「ἐν τῷ ἐπικαλεῖσθαι μ(ε) 私があなたに呼びかける時」、左の群衆の横に4:3「人の子らよ、わが栄光の主をいつまで辱めるのか／空しいものを愛し、偽りを求めて」から「οἱ υἱοὶ ἀν(θρώπ)ων 人の子ら」、ニンブスを着けた男性に4:4「主は忠実な人を選び／呼びかけを聞いてくださることを知れ」から「ὅτι ἐθαυμάστοσε κ(ύρι)ος τ(ὸν) ὄσιον (αὐτοῦ) 主はその敬虔な者を素晴らしいものとする(ことを知れ)」。横たわる人々の上には4:5「怒りに震えよ、しかし罪を犯すな。／床の上で心に語り、そして鎮まれ」を自由に引用し、「ἀ λέγ(ε)τ(ε) ἐν ταῖς καρδίαις ὑμ(ῶν) あなたがたの心に言え」と紫のインクで書く。十字架の左右に4:7「多くの者は言う。／『誰が私たちに恵みを示してくれるのか。／主よ、御顔の光を／私たちに昇らせてください』と」から「ἐσημιώθ(η) ἐφ ἡμ(ᾶς) τὸ φῶς 光を私たちに上に昇らせて下さい」とあり、各図像が第4篇の章句をそれぞれ絵画化したものであることが窺える。ある種リテラルな図像化と言えるが、詩篇の引用が銘文として書き込まれていなければ、それと断言出来ないような図像が多い。

余白詩篇では4作例がこの詩篇に挿絵を有する。『クルドフ』f.3v、『テオドロス』f.3、『バルベリーニ』f.9が4:2に、『クルドフ』f.4、『テオドロス』f.3v、『バルベリーニ』f.9vが4:7に、それぞれの図像を描く。まとめて列挙したのは図像が共通しており、これら頁を分けて描かれた図像が対になっていると考えられるからである。見開きになっている『クルドフ』では、f.3vに柱上行者が柱の上から籠を吊り下げ、従者らしき若い男性が手を伸ばしている。上空にはキリストのメダイオンが浮かぶ。剥落しているが、もともと銘にシメオンの名があったとされる¹⁷。向かい合わせになるf.4では壮年のダヴィデが十字架の中央にあるキリストのメダイオンに両手を挙げて祈っている。銘は「ΔΑΔ ΠΡΟΦΗΤΕΥΕΙ ΠΡΟΣ ΤΟΝ ΣΤΑΥΡΟΝ ダヴィデは十字架に対して預言する」。どちらの図像も柱や棒の高い位置に半身を現す対象に、左側面から両手を挙げる立像という構図になっており、見開きの左右に対置されることで視覚的な類似性が強調されている。4:2は神に訴える祈りだが、

¹⁶ *Ibid.*, p.77, Fig.96.

¹⁷ Šepkina, f.3v.

何故ここに柱上行者の図像が選ばれたかは不明である。2 篇の「あなたは私を苦しみから／解き放ってくださいました」を直訳すると「ἐν θλίψει ἐπλάτυνας μοι 苦しみにおいて、(あなたは) 私に (広い) 場所を与えてくれた¹⁸」となる。柱の上の極めて狭い空間で修行に励んだ柱上行者に対応するテキストとしては逆説的なようにも思えるが、信仰の深さによって厳しい修行も苦痛ではなくなるということを表しているのかもしれない。十字架上のキリストメダイオンは、4:7「御顔の光を」に重ねられているようだ。

残る 2 写本は一葉の表裏を用いてこの対比を成しているが、どちらにも『クルドフ』にはない図像が付け加えられている。『バルベリーニ』f.9 には無銘の柱上行者と従者、キリストのメダイオンが後の手で重ね描きされている。頁を捲って f.9v は図像がふたつあり、上に十字架のメダイオンに祈るダヴィデ、下に新たな図像として説教壇に立つ聖バシリオスが描かれる (聖バシリオスは次の詩篇 5:2 に対応する図像、後述)。ダヴィデは壮年で王冠を被っており、メダイオンの中のキリストは癖のある短髪に短い髭の、いわゆる「シリア型」と呼ばれる珍しい風貌に変えられている。銘は「δα(υ)ῖδ προφητεῦει εἰς τ(ὸν) στ(αύ)ρον ダヴィデは十字架に預言する」。ふたつの図像は共にテキストの方を向いており、上下で視覚的な類似が示されていることが窺える。『テオドロス』には更に新しい図像が追加される。f.3 の余白上方に、寝台に横たわるダヴィデを扇ぐ天使が建築モチーフと共に描かれ¹⁹、下方に無銘の柱上行者とその従者 (剥落しているがモノグラフ 2 冊によると修道士²⁰)、キリストのメダイオンがある。f.3v は十字架の中央のシリア型のキリストメダイオンに祈るダヴィデと、聖バシリオス (5:2 の挿絵) が上下に配される。銘は『バルベリーニ』よりも省略されており、「ὁ Δα(υ)ῖδ λέ(γει) ダヴィデは語る」。これは同写本に多く見られる銘である。f.3 の眠るダヴィデは前の詩篇である 3:6 「私は身を横たえて眠り、目覚めます。／主が私を支えておられるから」に対応しており²¹、こうした改変については、一葉や一篇のみを切り取る考察では不十分であろう。これら 3 写本に近い関係があることは明白であるものの、9 世紀の『クルドフ』を 11 世紀の残り 2 写本が写したというような単純な関係性ではない。

余白詩篇の中で『プリストル』f.11²²のみは、4:8 「あなたは私の心に／穀物と新しいぶどう酒の豊かな実りにまさる喜びを／与えてくださいました」に穀物や葡萄の木を描いている。本文から名詞のみを抜き出し描いた、極めてリテラルな挿絵である。銘も率直で、「σίτος 穀物」、「ἄμπελος 葡萄」、「ἐλαίαι オリーブの木」とある。セプトゥアギンタのこの章句では、実りの例として挙げられているものが「σίτου καὶ οἴνου καὶ ἐλαίου 穀物、葡萄酒、そしてオリーブの」となっているためであろう。

f. 5v

金字で書かれた題詞、コラム幅の挿絵、詩篇本文と続くのが 1927 番の基本的なレイアウトだが、

¹⁸ 詩篇 18:20 にも同じ言い回しが登場するが、こちらは罪から解放した、すなわち救ったという意味で用いられている。『旧約聖書 IV 諸書』、6-7 頁、註 10、32-33 頁、註 13。

¹⁹ 銘は「ὑπνοῦντα τὸν Δα(υ)ῖδ ὀρηπίζων ὁ ἄγγ(ε)λος 眠るダヴィデを扇ぐ天使」。

²⁰ Der Nersessian, p.18; Barber, f.3r.

²¹ 現存する余白詩篇でこの章句に対応する挿絵を持つのは『テオドロス』のみである。

²² Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs*, p.54.

この箇所のように前の詩篇の末尾に挿絵が置かれ、次の頁に金で題詞を書く例も時折見られる。ルーリングパターンに合わせて書かれた本文の間に挿絵用の余白を取っていく、テキスト優先の方法でレイアウトを作ったため、このようになったと思われる。第5篇に付けられた挿絵である。かなり剥落しているが、中央に青い屋根の天蓋があり、その下にキリストの半身が見られる。左下でニンプスと王冠を着けたダヴィデが跪き、両手を伸ばし祈りを捧げる。画面右で天使に追いやられた人々が折り重なって倒れ、左では聖職者二人を含む群衆がキリストに向かって祈っている。

ダヴィデの横に5:2「主よ、私の言葉に耳を傾けてください。／私のつぶやきを聞き分けてください」から紫のインクで「τὰ ῥήματά μου 私の言葉」と銘が書かれている。天使の上に5:7「偽りを語る者を滅ぼします。／血を流す者と欺く者を主は忌み嫌います」に基づいて「ἀπολεῖς πάν(τας) τοὺς λαλοῦν(τας) τὸ ψεῦδος 偽りを語る者みなを滅ぼす」、天蓋の上に5:8「しかし私は、豊かな慈しみによって／あなたの家に入り／あなたを畏れ敬いつつ、聖なる宮にひれ伏します」から「προσκυνήσω πρὸς(ε) ναὸν 宮にひれ伏す」、右側の群衆下欄外に5:11「神よ、彼らに罪を負わせてください。／その謀のために、倒れますように。／度重なる背きのゆえに、彼らを追い出してください。／彼らはあなたに逆らったのです」を踏まえて「ἀποπεσ[άτωσαν] ἀπὸ τ(ῶν) διαβουλι(ῶν) αὐτ(ῶν) その謀²³のために、倒れますように」の銘があり、こちらも紫のインクが使われている。左の群衆の頭上に5:12「あなたのもとに逃れるすべての者が喜び／とこしえに喜び歌いますように。／あなたは彼らを覆い／御名を愛する者があなたを喜び祝いますように」から「κ(αὶ) καυχῆσοντ(αι) ἐν σοὶ οἱ ἀγαποντ(ες) τὸ ὄνομα [σου] 御名を愛する者があなたを喜び祝いますように」の銘が見られる。どれも詩篇以外のテキストに典拠がある挿絵ではなく、リテラルと言えらる。聖なる宮から教会を連想して天蓋を描いたと思われる。

余白詩篇の第5篇を見てみると、『プリストル』f.11vに青い丸屋根と桃色の壁を持つ教会が描かれている。この挿絵は近くに書かれた記号と銘文によってタイトルに結び付けられている²⁴。銘は「Ἡ ἐξ ἔθν(ῶν) Ἐκκλησία ἢ κληρονομία σου τὸν Χ(ριστό)ν 民から出たエクレスシア²⁵、(すなわち)キリストを嗣ぐ娘」であり、教会を予型論的に解釈していることが判る²⁶。5:2に対応する挿絵として、先にも触れた『テオドロス』f.3v、『バルベリーニ』f.9vは説教壇に立つ聖バシリオスを描いている。どちらの写本も聖バシリオスの名前を銘とする。5:10「彼らの口は確かなことを語らず／その腹は腐っています。／舌は滑らかでも、喉は開いた墓」には、『テオドロス』f.4v、『バルベリーニ』f.10v、『プリストル』f.12が挿絵を有する。挿絵が施された章句が異なることもあるが、1927番とは全く異なる図像である。『プリストル』には蓋の開いた青い棺が描かれ、銘には詩篇本文そのままに「Τάφ(ος) ἀνεφγμέ(νος) 開いた墓」とある²⁷。この部分のみを字義的に絵画化したものであろう。残る2写本はほぼ同じ図像を採用しており、向かい合って対話の身振りを示す大男二人の開いた口に左右の足を突っ込んで立つ小柄な男が、上空から半身を現すキリストを見上げて祈るという奇妙

²³ 「議論」。

²⁴ セプトゥアギンタの5篇タイトルは「ὑπὲρ τῆς κληρονομίης ψαλμὸς τῷ Δαυὶδ 受け継ぐ娘のために。ダヴィデの詩」。岩波版ではこの箇所の七十人訳を「嗣女のため」としている。『旧約聖書IV 諸書』、9頁、註4。

²⁵ Ἐκκλησίαは「人々が集うこと、集う場所」が原義であり、キリスト教時代になって教会を意味するようになった。

²⁶ Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs*, p.54.

²⁷ *Ibid.*

なものである。銘によると大男らは不信心な者 (οἱ ἀσεβεῖς, 『テオドロス』のみ) であり、その口を踏んで立つ男が義人 (δικαίος) である。同章句はロマ 3 : 13 「彼らの喉は開いた墓であり」に引用され、続くロマ 3 : 19 「すべての口が塞がれて、全世界が神の裁きに服するようになるためです」を踏まえて生まれた表現なのかもしれないが²⁸、敢えて義人の足で口を塞ぐ理由は見当たらない。

f. 7v

コラム最上部に挿絵が置かれ、第 6 篇の題詞は前頁である f.7 末尾に書かれている。画面中央上部に天を表す青い弧、その下に立つ白髪のダヴィデは両手を自らのマントで覆って掲げ、祈る。中央から右側に延びる尾根の向こうに青い天蓋が見え、手前では黒く塗られた地面の上に人々が折り重なって倒れている。左側奥に赤い布で覆われた長椅子らしきもの、その手前に木枠の寝台、最前には黒い穴が開き、その中に青と赤の柱が立つ。この穴の中で擬人化されたハデスが人を掴んでいるとドゥヴァルトは書いており、青灰色の生き物らしき姿が確認出来るが、カラー図版でも細部の確認はやや難しい²⁹。

祈るダヴィデの横に紫インクで「κ(ύρι)ε μη τῶ θυμῶ σου 主よ、怒れるな」と書かれている。6 : 2 「主よ、怒りに燃えて私を責めず／憤りに任せて懲らしめないでください」の抜粋である。左手前の黒い穴の横に書かれた「ἐν (δὲ) τῶ ἄδη τις ἐξομολογήσεται[αί σου] 陰府にあつて、誰が感謝を献げるでしょう」は 6 : 6 「死ねば、誰もあなたを思い起こすことはありません。／陰府にあつて、誰が感謝を献げるでしょう」に基づいている。左上の長椅子と寝台の上の銘は 6 : 7 「私は嘆き疲れました。／夜ごと涙で寝床を浸し／床を漂わせています」から「λούσω καθ' [εκάστην] νύκτ(α) τὴν κλίνην μ(ου) 私は夜ごと涙で寝床を浸しています」とあるが、どちらにも横たわっている人物は描かれない。6 : 11 「敵が皆、恥を受けておののくように。／恥にまみれて瞬刻間に逃げ帰るように」を踏まえて、右で折り重なって倒れる人々の上には「ἀποστραφείσαν κ(αὶ) καταισχυθηείσ(αν) 彼らが逃げ帰りますように、そして恥辱にまみれますように」の銘が付けられている。

余白詩篇では、6 : 3 「主よ、憐れんでください。／私は病み衰えています。／主よ、癒やしてください。／私の骨はおののいています」に対応する挿絵が 3 写本に見られる。『クルドフ』 f.5 には「ΝΕΚΡΟΣ ΑΝ(ΘΡΩΠ)ΟC 死んだ人」の銘の下に、両手足を広げて横たわる白髪の男性が描かれる。『バルベリーニ』 f.11 もまた横倒しになった若者を描くが、銘は「Νεκρός 死体」のみである。加えて、天使に付き添われ寝台に横たわる男が、上空の青い半円から半身を現すキリストに手を伸ばし祈りを捧げる。男性の前には黒いモノクロームで描かれた有翼の悪魔が二人おり、片方は男から離れようとしているようだ。一方『テオドロス』 f.5 は、倒れる死体を描かず、寝台に横たわる男（ὁ ἀσθενὴς λέ(γει) 病の男は語る」の銘あり）と枕元の天使が描かれており、半身を現すキリストは青い弧を伴わず、悪魔は逃げ出す一体のみである。

『テオドロス』は 6 : 7 「私は嘆き疲れました。／夜ごと涙で寝床を浸し／床を漂わせています」の挿絵も、同じ頁に並べて描く。剥落はあるが、天蓋のある建築モチーフの中に寝台が置かれ、

²⁸ Barber, f.4v, Commentary.

²⁹ De Wald, p.5.

ダヴィデが横になっていることが判る。銘は「Ὁ Δα(υ)δ λέ(γει) ダヴィデは語る」、縦長の余白上下に寝台の図像が並べられるという構成になっている。上下に並べず裏の頁になるが、この図像は『クルドフ』f.5v と『バルベリーニ』f.11v にも見られる。『クルドフ』には建築モチーフがなく寝台とダヴィデのみで、「ΔΑΔ ΚΛΕΕΙ³⁰ ダヴィデは謳う」の銘がある。『バルベリーニ』は『テオドロス』同様に豪華な建築モチーフの中で寝台に横になるダヴィデが描かれ、「Δα(υ)δ κλέει ダヴィデは謳う」の銘がある。

f. 8v

第7篇のタイトルの後に挿絵があり、続く7:2冒頭のカッパがイニシャル装飾である。中央の青い半円の下にダヴィデが立って祈り、右側の丘の上に金色の衣を纏ったキリストが立って右手を差し伸べている。キリストの足元には黒々とした穴が口を開いており、その左右に置かれた棺から立ち上がる群衆がキリストを讃えている。左では人々が折り重なって倒れており、やはり下に黒い穴が見える。上空に青い半円で天が表され、そこから下に向けて二人の天使が半身を覗かせている。剥落のため判別は困難だが、下に倒れる群衆に向けて弓を引き絞っているようだ。人々の上に黒い線が複数残っているため、既に矢は刺さっていると思われる。

殆ど剥がれているが、ダヴィデの横に「κύριος ὁ θεός μου ἐπὶ σοὶ ἤλπισα あなたにおいて望みをかけた我が主なる神」の銘が見られる。これは7:2「わが神、主よ、私は御もとに逃れました。／迫り来るすべての者から私を救い／助け出してください」から、かたちを変えて引用したものであろう³¹。

キリストの頭上に「ἀνάσπιθη κ(ύρι)ε 主よ、立ち上がってください」とあり、7:7「主よ、立ち上がってください、怒りに燃えて。／身を起こしてください／私を苦しめる者に激しい憤りをもって。／目を覚ましてください、私のために³²。／あなたは公正をお命じになりました」を踏まえている。この動詞 ἀνάσπιθη は「上げる、昇る、起きる、立ち上がる」といった意味だが、類語である名詞 ἀνάστασις には「復活」の意がある。³³ 冥府降下は図像学用語であり、復活するまでの間に冥府に下ったキリストが、アダム、エヴァ、ダヴィデ、ソロモンら旧約の義人たちや洗礼者ヨハネを一足先に救い出す図像を指し、³⁴ 十二大祭にも数えられている。この挿絵では、キリストを讃える復活した義人たちの中に名前を持つ人物が描かれておらず、踏みつけにされたハデスや破壊された地獄の扉も見られないが、アナスタシスを踏まえた表現であることは間違いないだろう³³。

左横余白、天使の隣には7:13「もし人が立ち帰らず、剣を研ぎ／弓を引き絞って構えても」からの引用で「τὸ τόξο(ν) αὐτ(οῦ) ἐνέ[τεινε]ν 彼は弓を引き絞る³⁴」とある。折り重なる群衆近くの余白

³⁰ シェブキーナは ΚΑΕΕΗ としているが、写本図版を見る限り、κλέω「歌う、語る、祝福する」の写し間違いではないかと思われる。文脈からすると κλίνω「横たわる」の方が自然なように思えるが、明らかにそう書かれてはいない。Šepkina, f.5v.

³¹ De Wald, p.5. 「私は御もとに逃れました」の部分はセプトゥアギンタを見ると「ἐπὶ σοὶ ἤλπισα」。また、本文は主への呼びかけになっているが、銘は主格に変えられている。

³² セプトゥアギンタでは「目覚めて下さい、おお、我が神」。

³³ ドゥヴァルトはこれが初期のアナスタシス図像の型を踏まえており、最後の審判も示唆されているとしている。De Wald, p.5.

³⁴ 本文で語られる射手は自縄自縛に陥る不信心な者のことだが、ἐντείνω には「狙う、引き絞る」の他に「下に向ける」という意もあるため、穴に落ちた罪人たちに上空から射かける天使の表現になったのかもしれない。

には7:16「彼は穴を掘り、さらに深くし／自ら掘った滅びの穴に落ちる³⁵」から、「κ(αι) ἐμπεσεῖτ(αι) εἰς βόθ(ρον) そして彼は穴に落ちる」の銘が見られる。

余白詩篇の第7篇を見てみよう。7:2-3「わが神、主よ、私は御もとに逃れました。／迫り来るすべての者から私を救い／助け出してください。／さもないと、獅子のように私の魂を引き裂き／もぎ取る者がいても／誰も助け出してくれないでしょう」に3写本が挿絵を描いている。『クルドフ』f.5vには、ライオンに食い殺される男と、本文コラムを向いて祈るダヴィデに「ΔΑΔ ΕΥΧΕΤΑΙ ダヴィデは祈る」の銘が施されている。比喻として引き合いに出された獅子をそのまま描く。『テオドロロス』f.5vと『バルベリーニ』f.12（どちらも銘はὁ Δα(υ)δ εὐχ(εται)）は、これにダヴィデの祈りに応じるキリストのメダイオンや半身を付け足している。

7:7にも、これらの写本が挿絵を付けている。1927番と同様に詩篇本文の ἀνίστημι から連想し描いていることは明らかだが、他の作例にはない、余白詩篇特有の表現が見られる。『クルドフ』f.6では、円錐状の屋根が付けられた小さな建築モチーフの前で、ほぼ直角に腰を折り衣で両手を覆い隠すダヴィデと、その手前に坐る武装した兵士二人が描かれている。ダヴィデは戴冠しておらず、白髪である。兵士たちの姿によって、この建築物がキリストの墓であること、その復活を示唆していることが判る。眠る兵士たちはキリストの遺体が盗まれぬよう、墓の前で見張りを命じられていた（マタ 27:62-66）。一部判読出来ない部分があるが、長い銘が付けられている。「ΔΑΔ ΠΡΟΦΗΤΕΥΕΙ ΕΙΣ ΤΗΝ ΑΝΑΚΤΑCΙΝ... ΗCΤΕΡΙΑΔΟΥΙΕΝΤΟ³⁶... ΤΟΙC ΚΑΙΡΟΙC... ΤΟΥ ΥΥ ΤΟΥ ΘΥ ΔΑΒΙΔΕ ΗCΤΕΡΙΑΔΟΥΙΕΝΤΟ... ΤΟΙC ΚΑΙΡΟΙC... ΤΟΥ ΥΥ ΤΟΥ ΘΥ」ダヴィデは復活を預言する…後の(?)…然るべき時に…神の息子の」。一般的な、キリストが冥府に下って義人たちを救うアナスタシス図像ではなく、キリストの墳墓における遺体の不在すなわち復活の証という、ビザンティン世界では直截に描かれない場面にダヴィデを立ち合わせようとしたようだ³⁷。『バルベリーニ』f.12vも同様の場面を描くが、ダヴィデは王冠を身に着け髯も黒いようである。銘は「Δα(υ)δ προφητεύει εἰς τὸ ἅγιον μνημ(εῖον) ダヴィデは聖なる墳墓で預言する」で、『クルドフ』に倣っていない。『テオドロロス』f.7³⁸も大差ない描写で、銘はὁ Δα(υ)δ λέ(γει)のみだが、兵士たちは明らかに脱力し眠っている様子で表されている³⁹。どの墓も扉は閉ざされており、勿論キリストの姿も描かれない。『クルドフ』の第7篇挿絵は、以上が全てである。

7:13「もし人が立ち帰らず、剣を研ぎ／弓を引き絞って構えても」に『テオドロロス』f.7vと『バルベリーニ』f.13vが挿絵を施す。剥落や重ね描きの問題はあがあるが、本文コラム横の縦長の余白を利用し、どちらも同じ図像を採用している。キリストのメダイオンに祈るダヴィデは、右手をキリストに、左手を斜め下に伸ばしている。ダヴィデの示す先で、チュニックを着た男が下に向けて弓を構えている。

³⁵ セプトゥアギンタでは「自ら掘った穴に」。

³⁶ シェブキーナはこのように写しているが、図版を見る限り ηではなく ιで始まっているようである。接頭語 ὑπεροχ(η)らしくはものは読み取れるが、後半は不明である。Šepkina, f.6.

³⁷ 女性たちがキリストの墓で天使と邂逅し、遺体の不在を確認する《聖墳墓参り》の図像が一般的である。ダヴィデがひとり閉ざされた墓の前で礼拝するこれらの図像は、詩篇に施された挿絵だからこそ生まれたものであろう。キリストの墓を訪うダヴィデの図像は、詩篇写本の他の箇所にも見られる。

³⁸ 綴じ直しの際に間違えられたため、この箇所はフォリオが前後する。

³⁹ バーバーは衣で手を覆い腰を折るダヴィデの様子は、使徒たちの聖体拝領を連想させるとしている。Barber, f.7r, Iconography.

7:16「彼は穴を掘り、さらに深くし／自ら掘った滅びの穴に落ちる」の挿絵として、先に触れた男の射かけた矢が黒い線で表されている。その一本を受けた男が両手を挙げてさかしまに落ちていく先に穴が口を開いており、ひとりの男が更に掘り進めている。『テオドロス』はやや顔料が剥がれているが、『バルベリーニ』では落ちる男と穴を掘る男は、同じ青い衣を着ている。16節には『プリストル』f.15も独特の図像を持つ。テキストを踏まえて穴に埋まる男とでも記述すべきなのだろうが、地面に逆に突き刺さっており、下半身だけが穴から飛び出た状態である。周囲には「λάκκος (貯蔵用の)穴」、「βόθρος (地面に開いた)穴」、「Ὁ ὀρύγον τῶ πλησίον βόθρον, αὐτὸς ἐμπειεῖται εἰς αὐτόν 近くの穴、彼は自ら落ちる」と複数の銘が書き散らされている。第7篇の章句に対し、1927番では天使が穴に倒れる罪人たちに矢を射かけていたが、余白詩篇では矢を射かける者や自ら掘った穴に落ちる者など、テキストに沿った図像を採用したようだ。

f. 10v

テキストコラムの一番下に挿絵があり、第8篇タイトルと本文開始はf.11からである。全体的に剥落が著しく、顔の描き込みが判る人物はひとりもない。中央上に天を表す浅い円が配され、真下に立つダヴィデが右手を挙げる。左から芦毛の驢馬に跨ったキリストが、ペテロとヨハネらしき使徒を率いて進んでいる。驢馬の足元には自らの服を脱いで敷く人の姿が見られる。建築モチーフを背にしているのはやや奇妙ではあるが、エルサレム入城の図像である。8:3「幼子と乳飲み子らの口から、あなたは讚美の歌を整えられた」⁴⁰は、マタ 21:16に引用されている。神殿からの商人の追放の場面だが、直前のエルサレム入城において群衆が叫んだ「ダビデの子にホサナ」を、子どもたちが境内で叫んでいるのを聞いたキリストによる引用である。テオドレトスも註解でこの部分に言及している⁴¹。画面左で丘の上に立った人物が両手を広げオランスの姿勢を取る。足元では左右から頭を下げた動物たちが顔を寄せている。すぐ手前の水の中には生き物が満ちている。詩篇本文の内容から、この人物はアダムであり、生き物への名づけの場面(創3:19-20)であると考えられる。モチーフの多さに対して1篇に使える挿絵の枠がひとつしかないため、ダヴィデの左右に新旧約から直接関連のないエピソードが描かれることになった。

銘は、中央のダヴィデの横に「κ(ύρι)ε ὁ κ(ύρι)ς ἡμῶν(ν) 主よ、我らが主」、8:2「主よ、我らの主よ／御名は全地でいかに力強いことか。／あなたは天上の威厳をこの地上に置き」の呼びかけが誰によるものか示している。エルサレム入城の下に「ἐκ στόματος νηπίων 幼子の口から」、先に触れた8:3からの引用である。アダムの隣に「τί(ἐστίν) ἄν(θρωπ)ος 人とは何者か」、8:5「人とは何者なのか、あなたが心に留めるとは。／人の子とは何者なのか、あなたが顧みるとは」を踏まえている。その下の余白に「πάντα ὑπέταξας ὑποκάτω(ω) τ(ῶν) ποδ(ῶν) ἀραゆるものを足元に置かれた」、これは8:7「御手の業を治めさせ／あらゆるものをその足元に置かれた」による。

余白詩篇の場合、記号を用いて特定の章句と図像を結び付けることが可能であり、挿絵の配置も

⁴⁰ セプトゥアギンタとヘブライ語では内容が異なる。マタイの引用は七十人訳を取っている。

⁴¹ Migne, PG 80, cols. 913-920; Hill, pp.83-84. ドゥヴァルトも典拠は示さぬものの、枝の日曜日にこの章句が読まれること、神父たちがこれをエルサレム入城と関連付けていたことに触れている。De Wald, p.6.

自由なので、それぞれのモチーフを独立させることも、対比、連続させることも出来る。やはり 8:3 にはエルサレム入城が描かれるが、続く挿絵とは別のフォリオになっている。『テオドロス』f.6、『バルベリーニ』f.14 は共に剝落が酷いが（後者は重ね描きされている）近い構図で、驢馬に乗ったキリストの足元に衣を敷く者、枝を投げかける者が描かれ、都市を表す建築モチーフ（偶像の載った柱を確認出来る）の前にも枝を持った群衆が立つ。『テオドロス』の銘は「ἡ βαΐφόρος(ς) エルサレム入城（棕櫚の枝を持つ者）」、『バルベリーニ』は「τὰ νήπια τῶν ἑβραίων ヘブライ人の幼子たち」である。『テオドロス』は図像の名称を銘としているが、『バルベリーニ』は図像こそ同じであるものの幼子に焦点を当てた銘を施すことで、詩篇本文と図像との予型論的な結び付きを強調していると言えるだろう。どちらの写本も通常左から右という進行方向が逆になっているが、本文の方へ進んでいると考えれば説明は出来る。一方『プリストル』f.15v のエルサレム入城は本文下の余白を使っているだけでなく裏側^{ウエルソ}なので、f.10 のアブサロムから逃げるダヴィデと同様、何らかの理由があって定型を崩した可能性がある。銘は Ὡσαυτά、驢馬をペテロが先導し、門から棕櫚の枝を持つ人々が出迎えているが、衣を敷く人物は描かれない。壁の中にも住人の姿が見られる。

8:7-9⁴²には、『テオドロス』、『バルベリーニ』、『プリストル』の上記3写本に加え、9世紀の『クルドフ』、『パントクラトル詩篇』⁴³も挿絵を描く。描き方こそ異なれども、どれも1927番と同じくアダムによる命名の場面である。古い作例から見ていくと、『クルドフ』f.7は一部が欠損しているため牛や鹿、鳥などの動物たちが集っている部分しか残っていない。『パントクラトル』f.21⁴⁴は動物の数が少なく、獣が二匹と、横に立って右手を伸ばすアダムのみである。『バルベリーニ』f.14vでは天を表す青い半円の中に赤い星が見られ、その下に鶏、梟、鷺、鴨、鹿、獅子などの動物と、枠で囲まれた水辺に立つ赤い衣のアダムが描かれる。水の中に生き物は居ないようだ。『テオドロス』f.6vはこの章句に挿絵を持つ作例のうち、最も描き込みが多い。逆L字型の余白をいっぱいを使って、様々な動物や鳥、魚たちを描く。アダムは赤と青の衣を纏って二度描かれ、片方は鳥や獣といった地の動物たちに、もう片方は緑の縁取りをされた水の中に居る魚たちに手を伸ばしている。水場の周囲を飛ぶ鳥たちは魚を突き、狙っている。『プリストル』f.16では半裸の男性が右手を伸ばし、Αδάμの銘が見られる。木々や丘の表現の中に、兎、鶏、獅子、魚（水はない）、黒い鳥、山羊、牛、猿が確認出来る。違和感を覚えるのは、どの写本でもアダムが皆、衣を纏っていることである。全員長髪で、『パントクラトル』以外は髻のない姿である。1927番は短い髪に髻がなく、半袖の服を着ていた。表現には異同があるものの、第8篇のように1927番と余白詩篇の作例で、選ばれる主題がほぼ一致する箇所も見られることが判った。紙幅が尽きたため、以降の検討は別稿を設けたい。

⁴² 8-9篇は「羊も牛もことごとく、また野の獣／空の鳥、海の魚／潮路をよぎるものまでも」。

⁴³ I. Ševčenko, "The Anti-Iconoclastic Poem in the *Pantocrator* Psalter," *CahArch* 15 (1965), pp.39-60; S. Dufrenne, "Une illustration «historique», inconnue, du psautier du Mont-Athos, *Pantocrator* No 61," *CahArch* 15 (1965), pp.83-95; eadem, *L'illustration des psautiers grecs*, pp.15-46; Pls.1-33.

⁴⁴ デュフレンヌによるとこのフォリオには欠損があるが、驢馬の脚などが微かに残っていることから、この写本にも3篇に対してエルサレム入城の挿絵が描かれていたと思われる。Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs*, p.22, Pl.2.

◆本稿は、JSPS 科学研究費若手研究 JP20K12857 (研究代表者：辻絵理子)、及び挑戦的研究(萌芽) JP19K21718 (研究代表者：山崎敬一)の成果の一部である。